

「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学農学部3年 中山ひとみ

インドネシアは私にとって、環境経済学や森林経済学を学ぶようになった原点の国であり、並々ならぬ魅力を持つアジアのなかでもさらに特別な国であった。しかし一方で、私の今までの大学での3年間は、留学や国際交流には関心のない、思い返せばもったいない3年間だった。今回スプリングスクールで得たことは数多くあるが、特に語学を学ぶ意義とプレゼン発表での学びの二点に絞って報告したいと思う。

私にとって英語を学ぶ意義は文献を読むためという意味合いが強かったが、今回の留学を経て、英語はコミュニケーションの手段として必須であり、今後どのような進路を選択する上でも向上させていく必要があると強く感じた。具体的には、インドネシア大学日本学科の学生と私たちでディスカッションをする際に、日本語でもインドネシア語でも困難な場合は英語で話すのが便利だった。もちろん彼らの日本語は優れていて、私は何度も助けられた。では英語を身につけ、コミュニケーションが自在になったときに、さらにほかの言語を学ぶ意味はあるのだろうか。もちろんある。英語を話せない人とのコミュニケーションに有用であるだけではなく、町での人々の会話や何気ない声かけを、意味を持つ音として聞き取ることができたらどんなに楽しいだろう。人間の暮らしや人間そのものに興味がある私にとって、言葉はとてもおもしろく、なくてはならないものである。派遣留学の最初は早朝 (pagi-pagi) という単語を聞き取れただけで嬉しかったが、町で見ず知らずの人も易しい会話ができるようになったときは胸が躍った。

次に、グループワークを通じた成長について触れたい。私たちのグループは京大生2名、UI学生3名から構成されていた。テーマは、女性観や家族構成の歴史を議論していくうちにジェンダー平等について発表することに決まった。議論の過程では、彼らが自国の指針である「Bhinneka Tunggal Ika (多様性の中の統一)」についてどのように感じているか、異なる信仰を持つ学生間で宗教がどのように議論されているかなど、本題とは離れたことも時間をかけて話すことができた。ジェンダー平等の観点から、日本とインドネシアには相当の違いが存在する。その違いを統計と実体験に基づいて明らかにすると同時に、その違いが生じる原因を考えた。いつも授業の前後、放課後、食事や観光をともしてくれていたUI学生と、一步踏み込んだ議論ができたことは大きな収穫であった。歴史や時事に関する自分の知識不足を後悔した。自分たちの発表の5日前にUI学生の翻訳についてのグループプレゼンを見学させてもらった。彼らはほとんど原稿を持たず、質問が出たらグループ内で一度意見交換をしてから返答していた。私は今まで発表に苦手意識があつて原稿を読むような発表をしてしまう傾向があつたが、今回UI学生をまねてその場で話してみることにした。与えられた課題について議論するのではなく、一切制約のないところから課題を発見し、文化的背景の異なる者同士で議論し発表するという過程は、簡単にできる経験ではない。

今回の経験は今後取り組んでいく卒業論文や大学院での研究の大きなモチベーションになり、またさらにインドネシアへの魅力が大きくなった。次はインドネシアの農村や森林、水産業を見に行きたい。またたくさんの人との素敵な出会いと発見が待ち受けていると思う。

最後に、お世話になったすべての方々へ心より感謝申し上げます。